

弔辞

宇都宮とよ

由幾先生、と声に出して、先生をお呼びする幸せを、私たち生徒は数えきれないほど得ることができました。

由幾先生、というひびきは、それは香りの高い芳潤な飲みもののように、私たちの総身を満たしてくれるのでございました。

不覚にもこの幸せはいつまでも続くように思っておりました。失われてしまった今、つくづくと口惜しく、痛く愧じております。

ご体調の少し整われた昨年の夏、六月、七月、八月とお目にかかることができ、その度に、美しい時間を賜ることができました。

私たちは、先生に叱られることが大好きでした。その折も、老いの嘆きとか、あちこち痛いとかなんて歌つちやだめよ、など、談笑の中でこぼれる先生のおことばに、私

たちは、また叱られたと喜び合うのでした。

先生は、お歌のご批評のとき、低俗なもの嫌い、美しそうなことばの本質を見透し、虚栄のポーズに敏感であられ、もの柔らかなことばで、鋭い指摘をなさるのでした。いいかげんに作るということ、よく戒められました。下手でも言いたいことを言い得たとき、実に大切に私たちの心を掬いとつてくださいました。先生が、本当に大切にしている心というものを、私たちもおぼろげながら探すようになりました。先生の凝縮された、美意識の光が、あるときは強く、あるときはやわらかな明りとなつて、求めゆく私たちの道を照らしてくださつたように思っております。

私たちは、幸運にも、お勉強だけでなく、ご一緒の時間をたくさん持つことができた。今年のさくら、昨年のミモザ、湖北

のみ仏たち、エジプトのラクダ、中国の運河、たくさんの思いをいただきました。

その折々、私どもは、先生のお口から語られる、先生のご家庭のこと、満洲時代のこと、何やかや、治綱先生のお話など、私たちは生まれてもいなかったのに、そこに実際にはいるように感想を言ったりするのでした。すべて、先生の率直なお話のしかたによるものだったようです。人生、どこを切つても美しいということばがあてはまるような先生の映像を、たくさんいただきました。

治綱先生を失われ、信綱先生ご世界のうち今日に至るまで、「心の花」を支えてこられた先生を思うと、気が遠くなるようですが、先生のお力と心は、十分に伝えられ、幸綱先生のもと、新しい力がみごとに育っているようでございます。

先生、今しばらく、私どもは生きて、先生のことを語り合い、先生の「心の花」をことほぎ、心を磨くことに励んでゆきたいと思っております。

先生、ほんとうにありがとうございました。

平成二十三年二月五日

追悼句

いつせいに春の星座となりにけり
夕映の雪紅梅の香なりけり

二月四日

二月十一日

黒田杏子